

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL. 03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



熱烈歓迎

来日したドゥテルテ大統領と在日フィリピン人らとの交流会が開かれた。8割以上の支持率を誇るリーダーはここでも大人気。会場には1000人以上が詰め掛けた
=10月25日、都内ホテル (EPA=時事)

**個人会員D会費、来春五千円に値下げへ
現在80歳以上の割引会費は据え置き**

来年度から個人会員D（以下、D会員と表記）の会費を月額6100円から一律5000円に引き下げることが、11月1日の理事会で決まりました。会費改定は17年ぶりです。

現在、日本記者クラブの収入は83%が会費です。この会費のうち法人会員と法人所属の会員を合わせると、約70%をメディア加盟各社に支えていただいています。

記者OB・OG中心のD会員の会費も14%を占め、大きな支えになっています。しかし、D会員の総数は10年前に比べ100人以上減少し800人台となり、毎年平均17人ずつ減っています。以前より退職年齢が上がったことなどが影響しているのかもしれませんが、今回の措置で短期的には会費収入は減りますが、値下げによる新会員増加で中長期的には収入増になると見込んでの改定です。

また会費一律化に伴い、80歳以上の割引会費2000円を廃止します。20年前の割引対象者はD会員全体の4%でしたが、今は34%に激増、実に3人に1人の比率です。財政安定化のために廃止に踏み切った次第です。ご理解をお願いします。ただし現在の割引対象者と今年度末までに80歳になられる方々には、割引会費を継続適用します。

来春の値下げ実施直前には、新入会のキャンペーンを展開する予定です。現会員の皆さんにも、今から先輩、同僚、後輩に入会を広く呼び掛けていただければ幸いです。

（土生修一）

3・4
クラブゲスト
門間一夫・みずほ総研エグゼクティブエコノミスト／白井さゆり・慶応大教授／植木安弘・上智大教授／井上康生・リオ五輪日本柔道男子監督／会田弘継・青山学院大教授／倉田秀也・防衛大学校教授／森信親・金融庁長官／中国外交専門家グループ／ベルナル・ビゴITER機構長／マイケル・カービー北朝鮮における人権に関する国連調査委員会元委員長／上川あや・世田谷区議／平井伸治・鳥取県知事／ベルフェクト・ヤサイ比外相、エルネスト・アベリャ同大統領報道官／トルン紀美子さん、ピレー千代美さん、武田里子・大阪経済法科大客員研究員／ガブリエル・ドゥケ駐日コロンビア大使

5・6
会見レポート
シリーズ企画「北朝鮮の核とミサイル」／井上康生氏／平井伸治氏／海外に住む日本人と複数国籍

7
熊本取材団報告

8・11
第16回海外取材団報告
フランス・スイスのエネルギー事情

12
記者ゼミ
次世代ジャーナリストの必須IT講座

13・14
ワーキングプレス
富山 政務活動費

「迷ったら一歩前へ」
執念の調査報道で不正明らかに

チューリップテレビ 宮城克文

大隅良典氏 医学生理学賞

ノーベル賞の快挙を 究極のローカル

ニュースに 西日本新聞社 相本倫子

新・列島報告 大阪万博誘致

15
「夢よう一度」そろばん勘定が先走り

産経新聞社 鹿間孝一

書いた話書かなかった話

16・17
経済記者人生の点と点 商品情報

で世界をつなぐ 長澤孝昭

被災地通信 宮城県登米市

18
五輪ボート会場案に沸く

「メッカ」飛躍のチャンスに

河北新報社 本多秀行

リレーエッセー

19
小さなまちの大きな町長

地域おこしの先駆け 島本虎三さん

北海道新聞社 石川徹

試写会「湾生回家」 高井潔司

20
マイBOOKマイPR／寄贈書

21

会費値下げでD会員の増加めざす 来春、入会キャンペーン実施

1面でもお知らせしましたが、来年度からD会費会費が改定されます。

会費は現在の月6100円が5000円に値下げされる一方で、80歳以上の2000円の割引会費が廃止されます。ただし、今年度末時点で80歳以上のD会員は従来通りの割引会費が継続されます。また地方在住のD会員は月額3000円のままで

す。つまり現時点の会費との比較では、D会員の会費は安くなるか現状維持かのどちらかです。

D会員に関する過去3年間のデータによると、年間の平均入会者は33人、退会者は50人で差し引き17人が毎年減少しています。また毎年33人が新たに割引の対象に加わって

り、割引により毎年150万円前後の会費収入減となっています。

「入りたいけれど、会費がちよつと高い」との声もあるので、今回の会費値下げで入会者増を期待したいと思っています。

また、現役時代に会員経験がない方々はD会員の制度自体をご存じない人も多いため、来春の新会費導入直前に、法人会員各社の社報に当クラブの入会案内の掲載をお願いしたり、退職予定者向けのパンフレットを作成することを検討しています。

会員増について何かアイデアがありましたら事務局までお寄せください。もしD会員の入退会数が現状のま

目以降、割引会費廃止の効果で総収入は現行を上回るようになります。

●上半期のプレス向け行事は119回

日本記者クラブが主催した2016年度上半期のプレス向け行事(記者会見、昼食会、討論会・対談、研究会、記者ゼミ、記者研修会、取材団)は合計で119回となりました。

上半期でメディアの注目が集まったのは、選挙の立候補者同士が意見を戦わせる討論会でした。

参議院議員選挙公示の前日(6・21)に開催した「9党党首討論会」は、自民党総裁の安倍晋三首相や民進党の岡田克也代表など主要政党の党首が一堂に会し、テレビ、新聞で大きく報道されました。

立候補者が直前まで未確定だった東京都知事選の立候補予定者共同会見(7・13)には、上半期最多の303人が参加しました。都知事選史上

最も多い21人が立候補しましたが、当クラブでは①党推薦②現職国会議員③前回都知事選での得票などを考慮して宇都宮健児、小池百合子、鳥越俊太郎、増田寛也の4立候補予定者を招きました。そのほか、民進党代表選立候補者による討論会(9・2)も開催しました。

また、駐日大使の会見もメディアの注目を引きました。特に英国のEU離脱問題では、ヒッチンズ英大使が国民投票の実施前(4・4)と実施後(7・1)に会見。離脱決定後にはEU大使(7・5)、独仏の大使(7・6)が相次いで会見し、特派員報道を補完する取材機会を提供しました。

●今年度から会員名簿の発行廃止

毎年秋に発行していた会員名簿は、2011年度から個人情報保護の観点から個人会員の住所、電話番号の記載がなくなり利用価値が低下、さらに法人所属の個人会員は異動で毎月のように入れ替えがあるため「発行した途端に古くなる」のが現状でした。発行の費用と手間も考慮し、今年度からの名簿廃止を会員資格委員会に提案し了承を得ました。

皆様にはご不便をおかけしますが、何卒ご理解をお願いします。

(専務理事 土生修一)

倉田 秀也 防衛大学校教授



朝鮮半島政治が専門。北朝鮮の相次ぐミサイル発射は「軍事技術的には合理性あり。核戦争の敷居は下がっている」。一方、日本の防衛は「サッカーで言えばMFとGKがいるだけ」と警告。「日米韓と北朝鮮とのテクノロジー競争。これに負けたら撃たれる」

■ 10・6(木) シリーズ企画「北朝鮮の核とミサイル」②／司会：山本勇二委員／出席：88人
5ページに同シリーズ2回(初回：金田秀昭氏、9・30)をまとめた会見レポート

森 信親 金融庁長官



昨年7月就任以来、地域金融改革を進めている。「手数料稼ぎを目的とした顧客不在の姿勢ではダメ」「地銀は地域企業の事業を適切に評価する力を」「改革が元に戻らないよう有識者会議で文書化している」「金融庁は怖がられているが、批判、意見は大歓迎」

■ 10・12(水) 記者会見／司会：軽部謙介委員／出席：84人

中国外交専門家グループ
金燦榮氏、虞少華氏、王星宇氏

米中関係の専門家、金燦榮教授は米大統領選挙を聞かれて「誰が大統領になっても中米関係への影響は限定的だ。トランプがなれば同盟国、貿易相手国とそれぞれけんかする。日本は2回、けんか相手にされるが、中国は1回だけだ。日本は厄介でしょう」。3人とも自信満々で答えた。

■ 10・14(金) 記者会見／司会：坂東賢治委員／通訳：青山久子、陳鈴／出席：55人

ベルナルド・ピゴ 国際熱核融合実験炉 (ITER) 機構長



核融合は「未来のエネルギー」として日米EUなどが共同研究を進めている。「南仏で建設中の国際熱核融合実験炉を2025年に本格稼働させ、2060～70年には大型産業用の発電を実用化させたい」。「実現すれば、核分裂利用の今の原発よりはるかに優れている」

■ 10・14(金) 記者会見／司会：大牟田透・朝日新聞社論説委員／通訳：陰山由賀里／出席：53人

マイケル・カービー
北朝鮮における人権に関する国連調査委員会元委員長



北朝鮮を非難した国連人権報告書をまとめた。「最初の反応はチャーム・オフensive(魅力攻勢)だった。人権理事会の調査にも同意した。最高指導者の責任が問われることを心配し、守ろうとしたのだろう」。あの国にも弱みがあり、チャームを装う時がある。

■ 10・20(木) 記者会見／司会：杉田弘毅委員／通訳：長井鞠子／出席：45人

門間 一夫 みずほ総研エグゼクティブエコノミスト



5月まで日銀理事。終盤と質疑は「へえ」の連続だった。「日本の20年は失われていない。生産年齢人口1人当たりの実質GDPでみれば日米の実質的な生産性は似た伸び」「インフレ目標2%は野心的すぎる」といえる。日銀内部でこんな熱い議論をしているのか？

■ 10・11(火) シリーズ企画「<日銀検証>を検証する」①／司会：竹田忠委員／出席：70人

白井 さゆり 慶応大学教授



マイナス金利導入に反対した元日銀審議委員。9月発表の新政策についても「てんこ盛り。複雑さや不透明さが増した」と厳しい。ではどうするか。物価目標2%の2段階アプローチなど持論を熱く展開。「日銀は市場向けでなく、企業や家計に理解を求める説明責任を」

■ 10・21(金) シリーズ企画「<日銀検証>を検証する」②／司会：軽部謙介委員／出席：66人

植木 安弘 上智大学教授



広報畑を中心に国連勤務歴32年。「潘基文事務総長は前任の2人と違い、米をはじめ安保理常任理事国との協調を重視した路線だった」と総括。安保理改革は、「最初に非常任理事国の枠と任期を拡大、その後、常任理事国に進む2段階方式が現実的」と提言した。

■ 10・3(月) シリーズ企画「国連と日本人」⑬／司会：中井良則顧問／出席：28人

井上 康生 リオ五輪日本柔道男子監督



リオ五輪は男子7階級全てでメダル獲得。「柔よく剛を制す、と日本は技術力を重要視してきた。しかし、技術と体力の両方がないと五輪では勝てない。剛柔一体のトレーニングが必要だ」。論理的に説明できる新世代の指導者。「東京五輪は全階級で金をめざす」

■ 10・5(水) 記者会見／司会：別府育郎委員／出席：52人
5ページに会見レポート

会田 弘継 青山学院大学教授



近著『トランプ現象とアメリカ保守思想』が話題になっている元共同通信ワシントン支局長。産業構造の急激な変化に対応できず追いつめられた白人中産階級下層の反発が、トランプ現象の背後にあると熱く語った。「トランプが負けでもトランプ現象は終わらない」

■ 10・5(水) シリーズ企画「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 米大統領選」⑪／司会：杉田弘毅委員／出席：70人

会見余話

● 7回もクラブで会見

次期国連事務総長への就任が決まったアントニオ・グテレス氏は、国連難民高等弁務官として日本記者クラブに7回も足を運んだ。そのうち4回の司会をした。メモも見ずに要点を簡潔に語った。忘れられないのは2015年11月、10年の任期をもうすぐ終えて離任する最後の訪日の会見だ。

最後の会見を前向きに終わらせようと「心に残る業績はなにか」と聞いたのだが、「私の仕事は失敗に終わった」と述べ、表情を崩さなかった。100万人もの難民が中東・北アフリカから欧州に向かい欧州が門戸を閉ざしているさなかの会見だったから、胸を張れないという正直な感想だ。

「本当に不思議なのは、世界がこの10年で豊かにな



● 次回はメダルを持って

「半世紀を超える内戦終結への努力」を称えられ、今年のノーベル平和賞を受賞したコロンビアのフアン・マヌエル・サントス大統領。2011年9月13日、訪日した際、クラブで記者会見に臨んだ。身ぶり手ぶりを交え、ゆっくり話す。左翼ゲリラとの和平交渉はまだ始まっていなかったが「平和」が最初の質問だった。

ったのにもかかわらず、なぜこれだけ多くの難民が出現し、そして先進国が拒んでいるのか。私には分からない」と語った大国への抗議の言葉を思い出す。

21世紀最大の人道危機であるシリア情勢の中での事務総長就任。現場を熟知する適任者の登場だ。

(企画委員 共同通信社論説委員長 杉田弘毅)

上川 あや 世田谷区議会議員



性的マイノリティであることを公表して当選した初の公選議員。「トイレも性別にとらわれる必要はない。超高齢化社会。介助する人がトイレの選択で困らないユニバーサル・デザインを広げたい」。LGBTが差別されない世の中に向け「小さな声社会に届け」と訴えた。

■ 10・20(木) シリーズ企画「LGBTと社会」③／司会：宮田一雄委員／出席：25人

平井 伸治 鳥取県知事



総務官僚から知事に転じ3期目。人口最少県トップの知名度アップ戦略は「だじゃれ」。会見でも笑いで関心を引き付け、観光情報、行革実績を幅広くPRした。最後は句の松葉ガニをネタに笑顔で「鳥取にウエルカニ!」。クスクスと笑える動画はウェブで公開中。

■ 10・20(木) 記者会見／司会：川上高志委員／出席：60人
6ページに会見リポート

ペルフェクト・ヤサイ フィリピン外相(右)

エルネスト・アベリヤ 同大統領報道官



ドゥテルテ比大統領と共に来日した側近閣僚2人が会見。弁護士出身の外相は「米比相互防衛条約を打ち切る必要はないが、米比合同軍事演習は中国の疑念を高める」「南シナ海問題が中比関係の全てではない」と新政権の外交方針を語った。

■ 10・26(水) 記者会見／司会：土生修一専務理事／通訳：西村好美／出席：120人

海外に住む日本人と複数国籍

トルン紀美子氏、ピレー千代美氏、武田里子氏

重国籍を認めない日本の国籍法が、父母の国籍が違う家庭にどのような問題をもたらしているのか。独仏在住の2人が自らの体験に基づき具体的に説明。「子どもにとって両親の祖国はどちらも大事。国籍放棄はアイデンティティーの半分を奪う」「多様な日本人は国際化時代に重要」

■ 10・27(木) 記者会見／司会：中井良則顧問／出席：40人
6ページに会見リポート

ガブリエル・ドゥケ 駐日コロンビア大使



和平を拒否した国民投票も、ノーベル平和賞もびっくりのニュースだった。「私も驚いた。国民投票でNOを予想した人はほとんどいなかった」。和平交渉は再開される。「もっと広がりがあり持続できる平和の機会になってほしい」。折りに似た会見だった。

■ 10・28(金) 記者会見／司会：中井良則顧問／通訳：丸山啓子／出席：19人

「長年、国民は暴力に苦しんできた。傷口を正義と公正で修復する段階にある」と答え、犠牲者補償や国内避難民への土地返還を進める新しい法律や、5万2000人の元ゲリラ兵士の社会復帰などを説明した。通訳を待てない様子で付け加えた。「治安は劇的に改善している。誘拐は96%減少した。8年前には400人の市町村長が危なくて役所に登庁できなかった。今は1200人全ての首長が役所で執務できる。日本からの観光客や投資家にとって普通の国となりました。落ち着いた口ぶりから一転し、「生まれ変わった国」を強調していたのが印象に残る。

おみやげにいただいた伝統工芸の器は大切に飾っている。次回は平和賞メダルを手に見せてほしい。

(中井良則)

*これらの会見はクラブウェブサイトで詳報しています。会見動画もどうぞ。

北朝鮮

金田 かなだ

秀昭 ひであき

岡崎研究所理事

倉田 くらた

秀也 ひでや

防衛大学校教授

「北朝鮮の核とミサイル」のシリーズ企画。最初の2回は東アジアの安保情勢と軍事技術を中心にした。

北朝鮮は中、長距離弾道ミサイルから潜水艦発射弾道ミサイル(SLBM)まで多発しているが、金田氏は性能と開発レベルを詳しく説明した。

攻撃目標は米韓両軍であり、日本を最初に狙うことはないが、暴発の可能性は否定できない。監視と迎撃には、イージス艦と地対空誘導弾パトリオット(PAC3)の組み合わせをさらに増強、高度化する必要がある。

ただ、技術開発には時間がかかり、防衛費の問題もあるから、日米韓の協力体制を強化するのが当面の課題になる。

日本国民は災害やテロへの意識はあるが、「万一、ミサイルが飛来した時どこに避難するかなど、日常生活に密着した防衛意識も持つべきだ」と訴えた。

北朝鮮は目前にある脅威だが、より規模の大きな脅威は中国だと述べ、国際法を無視した海洋進出に外

攻撃目標は韓国と米軍だが

交、安保両面での備えを強調した。倉田氏は、北朝鮮は米国と戦争をする考えはないが、韓国を攻撃し市民を殺傷しようとする意識は常にあると分析した。

SLBM開発は、核による先制攻撃を受けても第2撃で報復する能力を持つためだ。今後注目すべきはミサイルの大气圏再突入実験であり、落下後に弾頭を回収するため、海上ではなく領土内で高角発射する可能性もある。ミサイル発射を最初に捕捉するのは米偵察衛星と韓国軍のリーダーで、迎撃態勢まで考えれば、日米韓の連携強化が緊急の課題だと述べた。

東アジアに軍拡競争が起きるので、という質問には、「日米韓の軍事テクノロジーが北朝鮮よりはるかに上回っていると誇示して、強い姿勢で抑止していく考えだ。国民の安全を守るには、決して負けられない競争になる」と話した。

元海上自衛隊海将と、現職の防衛大教授。それぞれ「話せないこともある」と言い、日本の迎撃ミサイルの阻止率などには明言を避けた。それでも、「今そこにある危機」を明確に説明してくれた。

企画委員 東京新聞論説委員

山本 勇二

井上 いのうえ

康生 こうせい

リオ五輪日本柔道男子監督

東京五輪もこの知将に託す

会見後、数人の出席者から異口同音に「クレバーな人だね」の感想を聞いた。

リオデジャネイロ五輪で2つの金を含む全階級メダルをもたらした、2020年東京五輪の指揮も託された。



玉石混交の質問を正面から受け止め、あるいは、いなし、崩し、自然と自分の形に持っていく、最後は内股で仕留める。現役時代の自身の柔道を想起させる問答だった。

印象に残る言葉は「剛柔一体」。柔よく剛を制すは柔道の理想だが、世界の格闘技の集合体である「JUDO」では、「柔」だけでは勝てない。「剛」をまとうには科学的知見も必要、と柔道以外の専門家の力も頼った選手肉改造の成果だった。4年後の東京五輪には「監督とし

て携われることに誇りを感じるとともに、とんでもないプレッシャーも感じている。柔道の素晴らしさを世界に発信するとともに、柔道を通して日本の素晴らしさも世界に発信したい」と話した。

リオ五輪の金メダルでガッツポーズも笑顔も見せなかった男子73キロ級の太田将平や女子70キロ級の田知本遥には「2人の振る舞いは、美しかった。最高の舞台で最高のパフォーマンスをみせ、なお自身を律していたのは柔道家が求める姿だと思う」とたたえる一方で、自身が金メダルを獲得した直後に大きなガッツポーズをみせたシドニー五輪を振り返り、「今では恥ずかしく感じています」と場内を笑わせた。

シドニーの自身のガッツポーズについては司会の私も質問を用意していたのだが、機先を制された格好で、容易に隙はみせない。

事前にしたためた揮ごうの文言は、「初心」。会見の最後に所見を求めると、「過去の揮ごうをめくって見ていたら、蓮舫さんと完全にかぶってしまいました。書いた後に気づいて残念です。申し訳ない」。笑いの取りどころまで、心得ている。

企画委員 産経新聞社特別記者

別府 育郎

平井 伸治 ひらい しんじ 鳥取県知事

地方創生の実践版

平井伸治鳥取県知事の『小さくても勝てる』という著書が霞が関界隈でも話題になっている。副題は「砂丘の国のポジティブ戦略」。安倍政権が経済再生の柱の1つと位置付ける「地方創生」の実践版でもある。



これを踏まえた記者会見で平井氏は、「小さいは『知・意・彩』だ」などと得意のダジャレも交えて「人口最少県の挑戦」に熱弁を振るった。

鳥取県の人口は57万人。過疎に悩み、地場産業の育成にも苦労が付きものだ。平井氏はその弱点を逆手に取り、「一種の卑下自慢」ともみえる手法で同県の農産物や観光、文化の国内、国外への売り込みの先頭に立ってきた。著書の副題にも絡む「スタバはないが、スナバはある」は平井氏が発した最も有名なダジャレで、ほかにも「ドンキがなくてもノンキに暮らせる」などダジャ

レ知事の異名はいまや全国区だ。ただ、平井知事の生い立ちは「お江戸のど真ん中」だ。千代田区外神田で生を受け、超名門の進学校から東大法学部を経て自治省（現総務省）に入り、米留留学も経験した「超エリート」でもある。キャリア官僚の修行の場として鳥取県に向向したのが縁で、史上最年少の副知事（6年間）を経て、2007年に鳥取県知事選に出馬、当選した。ちなみに前任者は改革派で鳴らした片山善博慶応大教授だ。

平井氏の手腕とアイデアで、過疎対策のための同県への移住者は年々増え、平成21～26年度の総数は4344人で全国1位となり、27年度は1952人で年2000人超も目前だ。平井氏の機知に富んだセールストークが多くメディアで取り上げられた結果ともみえる。

ただ、会見翌日には鳥取県で最大震度6弱の地震が発生し、平井氏もダジャレ封印で陣頭指揮にあたった。ゲストブックには「惜福・分福・植福」（幸田露伴の幸福三説が典拠）と書いた。平井氏は知事3期目だがまだ55歳。控室で国政転身の可能性を問うと「私は行政が好き、（政治家は）向いていませんね」と笑った。

時事通信出身 泉 宏

海外に住む日本人と複数国籍 二重国籍を認めない日本 閉じた制度に苦しむのは子ども

結婚も子どもも減り続ける日本だが、日本人と外国人の国際結婚は30件に1件を占め、国際結婚の両親から生まれる子どもは毎年、2万人前後いる。出生数は年間約100万人なので2%、つまり50人に1人は両親の2つの国籍を持つて育つことになる。ところが日本の国籍法は二重国籍を認めない。「国籍は日本だけ」という多くの日本人が見過してきた国籍法の矛盾点を、国際結婚の当事者が問いかける会見となった。



トルン紀美子さん（ドイツ在住・右）は海外に住む日本人にとつての問題点を3つ挙げた。

まず、子どもの出生から3カ月以内に日本国籍の留保届を出さないと、国籍を失う制度。日本国内なら14日以内の期限を過ぎても出生届を

受け付ける。しかし、外国で生まれただけで拒否される。「せめて1年以内に延ばしてほしい」

第2に国籍を2つ持つ場合、22歳までにどちらかの国籍を選択する制度。選択しなくても法務大臣の催告を維持している例も多い。「人によって差が出るのは不公平。機能していないのなら削除してほしい」

第3は外国籍を取得すると日本国籍を自動的に失う規定。仕事のため外国籍を必要とする日本人は国籍放棄を強いられる。「海外で働く人材を日本から切り離そうとする」

フランス在住のピレー千代美さん（中）は2人の子どもの育てた体験を語り「父か母かどちらかの国籍を踏み絵のように選ばせる。多様な背景を持つ『日本人』が増えることは日本にとってプラスなのに」

さらに武田里子・大阪経済法科大学客員研究員（左）は研究者の立場から「形骸化した制度を維持しても弊害は多い」と強調し、二重国籍子弟の日本留学支援を提唱した。

生まれ育ったアイデンティティを取り上げる。グローバルな活躍を排除する。閉じた法制度に苦しむのは子どもたちだ。

日本記者クラブ顧問 中井 良則



家屋の損壊が激しかった益城町中心部。解体作業の遅れが課題となっている(10.3)

熊本取材団(10・3〜5) 2度の震度7から半年 課題の多さ実感

日本記者クラブの熊本取材団は10月初め、熊本地震の被災地を3日にわたって巡り、復旧・復興に取り組む方々や被災者の話を聞いた。衝撃の大きさを目の当たりにし、被災者からは苦しみと行き場のない怒りが伝わってきた。崩落した家のがれきの撤去が進まないなど、課題の多さも実感させられた。

集合した熊本空港からマイクロバスに乗って約20分。地震の被害が集中した益城町^{ましきまち}の役場に着いた当初は、地震の痕跡があまり分からな

災の中心部は、がれきの山脈と化していた。

同町文化財の潮井神社の断層では、地盤が数メートルにわたってずれ、ご神木が倒れていた。2300年の歴史を持つといわれる阿蘇神社(阿蘇市)では、日本三大楼門の1つなど重要な文化財6棟が全損壊していた。重文



は、倒壊した材木の一本一本まで吟味しながら公費を使って復元を模索する。それ以外の施設の復元は、資金繰りのメドがつかないという。

仮設住宅では取材団員がそれぞれ、住民や仮設の商店主らの声に耳を傾けた。「集会施設の運営主体がはっきりしない」「住民の意見をもっと拾い上げてほしい」といった嘆きが聞かれた。その北東約20キロの地域。民家が損壊して死傷者が出たほか、国道の橋が崩落して交通が寸断された被害の大きさからか、強い怒りの声を上げる住民もいた。

熊本のシンボル、熊本城では、立

った。ところが、町職員の案内で歩き始めると、損壊・崩落した家が徐々に目に入るようになり、被災の中心部は、がれきの山脈と化していた。



熊本城「飯田丸五階櫓」は右隅の「一本足」が辛うじて支えていた。倒壊防止の補強工事は7月末に完成(10.4)

「熊日に言いたい」

熊本空港近くにつくられた仮設住宅団地に住む高齢の女性は、日本記者クラブ取材団の記者に、団地内に乗り入れるバスについて不満を述べたという。「路線バスとの接続が悪い」「仮設団地同士を結ぶ路線があれば避難所で一緒だった人に会いに行けるのに」と。その後、女性は続けた。「(こんな話を)熊日に言いたい。熊日に聞いてほしい」

県民だれもが「まさか」と思った2度の震度7から半年。さまざまな報道を続けてきた。連載中の「被災者日記」では平穏な日常を奪われた人々の声を聞き続けている。今回、取材団にも「関心を持ち続けて」と訴えるつもりだった。しかし逆に熊日に対する被災者の思いをすくい取ってもらった。まだまだ多くの人に寄り添う必要があると教えられた。

熊本日日新聞社編集局編集総務

佐藤 敦

永森 睦夫

■日程(2泊3日)

10月3日(月)熊本空港集合、益城町庁舎へ▶西村博則・益城町長会见(益城町庁舎)、役場周辺の被害が大きかったエリアを視察▶潮井神社(同町津森地区)、テクノ仮設団地(小谷地区)など益城町周辺取材

10月4日(火)熊本城視察・取材▶南区液状化復興対策協議会・荒牧康会長ほかと懇談(南区日吉地区周辺)▶蒲島郁夫・熊本県知事会见(熊本県庁)▶「NPOくまもと」樋口務理事会见

10月5日(水)阿蘇大橋崩落現場付近を視察▶阿蘇神社訪問、全壊した楼内などを視察。権瀬宜・池浦秀隆さんらによる説明▶熊本空港で解散

〔参加10人〕

第16回海外取材団 フランス・スイスのエネルギー事情

政策転換と核燃料サイクルの現場(10・9〜19)

フランスに半歩先の日本を見た

共同団長 服部 尚 (朝日新聞大阪本社編集委員)

フランスの高速増殖原型炉「フェニックス」がある南仏マルクールに着いたのは日程中盤。前半は、仏の東にあるビュール村や北のシエルブルを電車やバスで何時間もかけて回り、食事も車内でサンドイッチで済ますことも多かった。普段の倍速で毎日が過ぎていく感覚だ。日本記者クラブエネルギー取材団の第3弾となった今回は、またいつものような強行軍になった。

原子力利用の究極の理想の形は、ブルトニウムを増やして核燃料として利用するための高速増殖炉を中心とした核燃料サイクルだ。原子力大國のフランスは、開発の先陣を切ってきたが、高速増殖炉「もんじゅ」のフランス版といえる「フェニックス」

ス」は廃炉作業の真っ最中だった。新たに打ち出した次の段階の実証炉「ASTRID(アストリッド)」計画は先行きが不透明のままで。

開発担当者は日本の資金支援に期待感を示し、「高速炉開発は国際協調を前提に考えている」と訴えた。

フランスでさえ、単独で核燃料サイクル開発を続けていくことが難しい状況であることを浮き彫りにした。

高速炉に限らず、フランスの原子力開発が岐路を迎えていることを、あちこちで強く感じた。日本の試算の3倍もの建設費と推定される新規

原発建設現場、各国が再処理路線から撤退してしまい、顧客不足に悩む使用済み核燃料再処理工場。逆に、

普通の原発(軽水炉)の寿命を延長する既存体制の維持が当面の重要な課題となっていた。

「もんじゅ」の廃炉も視野に高速炉開発の見直しを進める日本だが、高速炉開発や再処理の看板は下ろさないままで見られる方策を探っているように見える。半歩先の日本の姿をフランスに見る思いだった。

厳しさ増す原発大国

共同団長 井田 徹治 (共同通信社編集委員兼論説委員)

「フランスの原子力分野では最近、大きな変化があった。昨年6月に示された政府の方針で、アレバは2つに分割され、原子炉部門はフランス電力(EDF)に売却された」。大企業の高層ビルが立ち並ぶパリ郊外のビジネス地区、ラ・デファンスに建つ「アレバタワー」の一室で

同社のギヨーム・デュロー上席執行副社長は取材団にこう述べた。

58基の原発が電力の約75%を供給する欧州の原発大国フランス。だが、原子力企業は巨額の負債を抱えてリストラを余儀なくされ、原発依存度

を2025年までに50%まで下げることを定めた法律が採択された。取材団のインタビュールなどを通じて、フランスの原子力を取り巻く状況の厳しさを実感した。

多額の負債を抱えたアレバは、政府の資本注入と同時に分社を迫られた。原子炉プラント部門(アレバNP)はEDFに売却、残された「新アレバ」は燃料加工や放射性廃棄物の処理などのビジネスを担う。

デュロー氏は「新アレバには多額の負債が残っている。政府の資本注入に加え、今後、30億ユーロ程度の増資を第三者の投資家から募る必要がある」と述べた。

アレバ支援を続けてきたEDFも、今回見学したフラマンビル原発3号機など欧州加圧水型原子炉(EPR)の建設費膨張や工期の遅れなどが原因で経営が立ち行かなくなり、政府の支援を受けることになった。16年6月末段階の負債は362億ユーロにも上る。

フラマンビル3号機の建設費は105億ユーロとのことだった。新設に必要な資金の獲得は難しく、40年の運転寿命の延長に活路を見いだすしかない原子力産業。その姿はフランスも日本も共通している。



地域情報委員会の役割

共同副団長 青野 由利
(毎日新聞社論説室専門編集委員)

フランスの原子力関連施設には、地域の声をくみ上げる独特の組織の設置が義務づけられている。福島原発事故以降、そんな話を何度か耳にし、一度取材したいと思っていた。今回、念願かなって複数の地域情報委員会のメンバーと会うことができたが、印象は予想とは少し違うものだった。



ラ・アーグ核燃料再処理工場の使用済み燃料貯蔵プール

「グ」。安全性などに疑問があつた場合に独自に調査する権限もあるという。透明性確保の装置であるのは確かだが、合意形成をめざしているわけではな

話を聞いたのは、ビュール村の核のごみ最終処分研究所の「CLIS」(地域情報フォロアップ委員会)と、ラ・アーグにある再処理工場およびフラマンビルにあるフランス電力(EDF)の原発施設の「CLIE」(地域情報委員会)。メンバー構成は国会議員、地元自治体の議員、労働組合や環境団体の代表、科学や経済の専門家などで、法律や政令で定められている。年数回の公開討論会を開き、一般の人や専門家、メディアなどが参加する。「何かを決定するのではなく、プロジェクトについて情報を得て、住民に情報を提供する」(ビュール)、「民主的な討議の場を提供し、公表するのが役目」(ラ・ア

い。さらに感じたのは、反対派の委員はいるものの、総じて地元経済や雇用へのプラス面に着目し、地域の中で施設をうまく運営していこうという姿勢。基本的に原発に肯定的なフランスらしいという気がした。もう1つの疑問は財源の出所。ビュール村のCLISでは半分が国の補助金、半分がEDFやアレバ社など廃棄物を出す企業から出ていると聞いた。これについては、「われわれは電力会社や事業者からお金はもらわない。それでは独立性が失われる」とラ・アーグのCLIEの委員長も首をかしげていた。こうした「あれっ?」という話も、現地に行けばこそ。記者クラブ恒例の「弾丸ツアー」を今後の糧にした

恵まれた最終処分地の環境

共同副団長 水野 倫之
(NHK解説委員)

今回、高レベル放射性廃棄物の最終処分地の選定が進むフランスとスイスの地下研究所を取材した。

事前にいずれも粘土層だと聞いていて、子どものころに練って遊んだ湿っぽい粘土が広がる世界を想像していたが、これがまったく違

い、乾いて石のように硬いものだったことにまず驚いた。まわりを見渡しても水たまりさえない。

フランスの最終処分実施主体のANDRAやスイスの実施主体のNAGRAの説明によると、いずれも1億6000万年前に海底で堆積したもので、例えばスイスの場合、17%は水分とのことだったが、これは当時の海水がそのまま閉じ込められているもので、大昔から水がほとんど移動していない証拠にもなるという。放射性廃棄物の処分でも問題になるのは放射性物



スイス・モンテリ岩盤研究所には日本人スタッフも。NAGRA(日本のNUMOにあたる)の榎利博マネジャーの説明を受ける

質が地下水で地上まで運ばれてしまうことだが、いずれの担当者もその可能性は極めて低いことを強調していた。また地震もほとんど起きないということ、こうした恵まれた地質環境の存在が、日本よりも最終処分地選定の手続きが進んでいる理由の1つであることはわかった。

ただ、やはりそれだけではないようだ。聞けば両国とも過去には国民の大規模な反対に遭うなど、とんとん拍子ではなかったという。その教訓を生かして責任の所在をはっきりさせたり処分地選定の進め方を細かく定めるなどして、国民の理解を得ようとしてきたと語る。強力な中央集権国家だったり直接民主主義だったり、国の体制の違いもあるかもしれないが、最終処分のめどがなかなか立たない日本にと

っても学ぶべき点が多いように感じた。いずれにしても短期間で多くの原子力関連施設を回れたのは取材団ならではのことで、大変勉強になった。この次は中国やロシアなど、簡単にはいかなさうな地域の施設をぜひ取材してみたい。

●日本と異なる原子力大国の背景

フランスはなぜ原子力大国であり続けるのか——今回の取材で知りたいたーマの1つだった。高レベル放射性廃棄物の最終処分地となるビュール村では、住民の反対どころか誘致活動があったことに驚いた。他の施設でも、住民側の代表者らに話を聞くと、同様の経緯や事業者の取り組みに理解を示す話が多かった。

その背景は、政府方針に従うという中央集権的な考え、あるいは国の役人が取材団に語った「合理的な『デカルト的』精神によるもの」かはわからなかった。ただ、日本とは異なる背景を肌感覚で知り得たことは貴重な取材だった。

朝日新聞社科学医療部 石塚広志

●フランスとどう付き合っていくか
「原子力は、主権を保持していくために重要だ」戦略的な選択として、再処理を今後も続けていく。フランスの原子力関係者から出る言葉は、前向きだった。その自信はどこからくるのか、測りかねることもしばしばだった。日本が原子力政策を進める上で、フランスとどのような付き合いしていくかは大きな課題だ。前に突き進むフランスから学ぶべき点、追隨してはならない点を冷静に見極めなければならない。

フランスの現状に深く接したこと、大きな財産だ。強行軍に耐えた取材団には連帯感が生まれた。記者生活の中でも希有な体験だった。

読売新聞社論説副委員長 大塚浩之

●「成熟度」の差を痛感

今回の取材で、フランスが「原子力大国」として強い自信を持っていることが、関係者の言葉の端々に感じられた。その背景には、国内電力の7割超を原発でまかなっている点に加え、高レベル放射性廃棄物の最終処分場の整備が着実に前進しているという事実があるのではないか。

核のごみの処理という「出口」にめどが立ちつつある点は、原子力国としての「成熟度」において日本が大きく水をあけられていると言わざるを得ない。地震をはじめとする自



仏原子力・代替エネルギー庁(CEA)のカレール・マネジャーから高速実証炉ASTRID計画について聞く

■日程(9泊11日)

- 10月9日(日)羽田発パリへ
- 10日(月)▼新アレバ・デューロー営業等担当上席執行副社長▼アレバNP・ルリエール営業等担当副社長▼環境・エネルギー・海洋省/エネルギー・気候変動総局・パン副総局長▼放射性廃棄物管理機構(ANDRA)・ウズニアン国際部長▼フランス電力(EDF)・ユルサ原発新設計画担当上級副社長▼ダンタック上院議員(エコロジ・グループ)
- 11日(火)ビュール村へ▼放射性廃棄物管理機構ビュール地下研究所・広報担当者の概要説明▼地域情報フオーローアップ委員会代表▼研究所と技術センタール見学▼パリへ
- 12日(水)シエールブルへ移動▼アレバ・ラ・アーク核燃料再処理工場・マルティネ副工場長の概要説明、使用済み燃料の貯蔵プール等見学▼ビエ・ラ・アーク再処理工場地域情報委員会委員長
- 13日(木)▼EDF社フラマンビル原発・欧州加圧水型原子炉3号機建設現場の説明▼フラマンビル原発地域情報委員会代表▼パリ経由でアヴィニオンへ移動
- 14日(金)▼フランス原子力・代替エネルギー庁(CEA)/マルクール研究所・ギベルト・研究所長、カレール

アストリッド(ASTRID)計画マネジャー▼高速増殖原型炉「フェニックス」廃炉視察▼アレバ社メロックスMOX燃料工場・ジュルダン製造部長▼アヴィニオン発パリへ

15日(土)パリ滞在
16日(日)パリからスイス・バーゼルへ▼近郊ジュラ州の州都ドゥレモンへ
17日(月)▼モンテリ岩盤研究所・ボンボリスNAGRA国際プロジェクト室長▼ビュレンリンゲン放射性廃棄物中間貯蔵施設見学

18日(火)バーゼルからパリへ▼パリ発
19日(水)羽田着、解散

■参加者

服部尚(朝日新聞社)井田徹治(共同通信社)青野由利(毎日新聞社)水野倫之(NHK)石塚広志(朝日新聞社)大塚浩之(読売新聞社)三浦真(読売新聞社)浅沼直樹(日本経済新聞社)山川剛史(東京新聞)立野理彦(北海道新聞社)半澤正輝(福島民報社)高橋央樹(新潟日報社)岡本賢一郎(NHK)石川洋(日本記者クラブ)
通訳・岡部昌史、古垣内隆の両氏
■事前説明会・勉強会(10月7日)
バレット臨時代理大使、フェリックス原子力参事官、バアラドゥー広報参事官(仏大使館)、NUMO(原子力発電環境整備機構)の加来謙一地域交流部課長など(クラブ大会議室)

然災害の少なさなど環境が大きく異なる面はあるものの、学ぶべき点は多いと考えさせられた。

読売新聞社科学部主任 三浦 真

●最前線に触れ新鮮な驚き

国内に仕事を残し、後ろ髪を引かれながらの出発だったが、原子力大國フランスと、スイスの核燃料サイクルの最前線を目の当たりにし、そんな思いも一気に吹っ飛んだ。

原子力施設に対する人々の信頼が高いことに新鮮な驚きを感じる一方、日本でもどこまで実現できるのか疑問に感じた。特に核のごみの処分は日本との違いが大きい。今後の取材を通じてあらためて聞うていきたい。

それにしても強行日程の連続で、まるで合宿のような日々だった。単独ではここまで充実した出張は決して組めなかっただろう。関係した皆さまに心から感謝を申しあげたい。

日本経済新聞社科学技術部 浅沼直樹

●地質が日本とあまりにも違う

欧州の地質の状況を詳しく知り、あらためて日本が不安定な国土であることを思い知らされた。

アンモナイトがいた時代、フランスからドーバー海峡へと続く広大な地域は穏やかな海。ゆっくりたまった堆積物が粘土となり、さらに時間をかけて貝殻などが堆積して石灰岩

層に。その上に人々の暮らしがあるのか。地震がほばないのもうなずけた。日本とはあまりに違う。

原発とその廃棄物にどう向き合うのか、いろいろな意見がある。科学で乗り越えられる面もあるだろう。されど、日本特有の条件を考えずして未来はない。そう痛感した。

東京新聞原発取材班キャップ 山川剛史

●処分場の選定手法を考える

海外取材団に参加するのは初めてだったが、非常に密度の濃い取材をすることができ、フランス、スイス両国のエネルギー政策に対する理解が深まった。

個人的に関心があったのは、高レベル放射性廃棄物の最終処分場をどのように選定するか。両国とも最終決定はしていないものの、日本よりもかなり先行している。研究施設の地元に強力な地域振興策を打ち出したフランスと、候補自治体に拒否権を認めない方針のスイス。北海道の幌延町では処分技術の研究が行われているだけに、それぞれの手法には考えさせられるものが多かった。

北海道新聞社報道センター 立野理彦

●フクシマ原発事故の教訓は

取材は原子力関連事業者が中心となったが、フランスが今後も原発を推し進めようとする考えがひしひし

と伝わった。関連企業はもとより、原発監視のために地域代表者らでつくる情報委員会のメンバーでさえ、「福島」の事故は地震国ならではの事情で特別」と思っていることには驚いた。

「国ごとの事情」と言ってしまうばそれまでだが、東京電力福島第一原発事故の反省、教訓は海外に伝わっているのだろうか。あらためて考えさせられた。原発大國がどのような道を歩むのか、今後も注視したい。非常に内容の濃い11日間だった。

福島民報社東京支社編集副主任

半澤正輝

●「責任」とは何だろうか

仏原子力大手、新アレバの幹部は「使用済み燃料の再処理は経済性を超えた環境への責任だ」と語った。放射性廃棄物管理

公社は、将来世代への責任として「可逆性の担保」を強調した。フランスは高



マルクルのアレバ社モロックスMOX燃料工場

速炉開発に絶対の自信を見せた。だがアストリッド計画マネジャーの言葉には、同計画の実現性に不透明感が漂った。

日本でも最終処分をめぐる「現世代の責任」という言葉が使われる。国はこれまでの総括もないままに原発の再稼働を進め、核燃料サイクルを維持する方針を示す。高速炉開発の議論も始まった。「責任」とは何だろうか、今も考えている。

新潟日報社報道部 高橋央樹

●日本の現状を考える契機に

高レベル放射性廃棄物処分という私が学生時代から追究し、記者を志すきっかけにもなったテーマについて、最前線取材する貴重な機会に恵まれた。特に印象的だったのはフランスの放射性廃棄物処分計画で、既に処分地が決まっている北欧諸国の陰に隠れがちだが、規模や具体的な技術開発では世界最先端なのではないだろうか。

核燃料サイクルも含め、海外から見つめることで、日本の現状や課題が自分の中であらためて整理できたと思う。今回の知見や取材先との関係を、今後のニュースや番組の中で最大限アウトプットしていかなければという強い使命感に駆られている。

NHK科学文化部 岡本賢一郎

58
記者ゼミ

聞き慣れないソフトが登場するが、今回は



神奈川新聞社デジタル編集部デスク
牧野 昌智

ITスキルを駆使し、ビッグデータや複雑な情報を整理、統合してニュースをあぶり出す。そんな次世代記者を養成する、志高い講座の7回目は「表計算ソフトさらに活用」だ。毎回聞き慣れないソフトが登場するが、今回は

似た状況下にあるのだろう。長く親しまれた「紙」から「ウェブ」へ移る革命が進み、記者自身も変化を迫られている。

今、新聞業界も

表計算ソフトさらに活用

ウェブ時代も記者楽しめる？ 膨大データの活用法に得心

9・20(火) 講師：西尾能人・朝日新聞社統合編集センター次長／出席：13人+ネット視聴4人

「一身につけて二生をえるが如く」と、有名な言葉を残したのは、かの福沢諭吉だ。幕末から明治の激動期を生きた同時代人は、まるで2度の人生を経験したようだ」と表現した。知的好奇心あふれる偉人は2度目の人生も楽しんだはずだ。

「Libre Office」をダウンロードして臨んだ。

最初の素材は球団の総年俸と有名選手の年俸の一覧表。それぞれのデータを統合し、各スター選手の年俸が球団側にどのくらいの負担となっているのか、その割合を出す。この辺りはこなせるのだが、後半に進むにつれて講師の歯切れの良さは加速していく。こちらはだんだんと頭と手の速度が鈍ってくる。

ハイライトは、公開されている出生数や保健所の統計を使って、ある傾向を浮き彫りにした作業だろう。

平日より土日の出産が著しく少ないことや、肝疾患による死亡率が高い地域のあることが分かった。

講師いわく「これはデータと格闘するためのツール。まず、こんなことができるはずと見当がつけばよい」。

確かに素材があり、表現できるソフトの当たりがつけば、試してみるか、と話は進む。これまでの講座で得た知見もまた同様だ。

小さな地方紙でどこまでできるか未知数だが、2度目の記者人生も楽しみたい。

スクレイピング

ネットから独自にデータを収集

10・4(火) 講師：田中孝憲・報知新聞社メディア戦略局編集部／出席：17人+ネット視聴3人

「家電製品の値段が、ネット上で細かく変動していること、知っていますか？」

講師を務めた田中さんの質問に、「ネットショッピングの値段は変化したことが普通だ」と考えた。しかし家電量販店のサイトで10数万円するテレビが、ある日の午前中だけ2万円ほど値下がりして、すぐ戻っていた事実には驚いた。

この変化は、インターネットからデータを決められた時間ごとに引き出す「スクレイピング」という手法を用いて判明した。

普段は右クリックでコピーしてデータを貼り付けるが、長期間、膨大な量を集めるのに手作業では追いつかず、ミスも起きやすい。そこで今回は、グーグル社の表計算ソフト「スプレッドシート」を使ってデータを自動的に集める方法を学んだ。

講義中、あつけにとられる場面が多かった。データを定期的に引き出すには、プログラミングの知識が必要

要だからだ。どの数字を何時間おきに取得する、できなかった場合は先送り。自らの考えを情報収集に反映させるには、プログラミングの基礎知識は避けて通れないとあらためて実感した。

便利な反面、この技術には注意点がある。記事など著作物を引き出すと著作権法に違反するし、設定を誤ると、不要なデータが加わったり、欲しいデータを取り損ねたりして分析の根拠が揺らぐ。相手先がホームページを更新したときには臨機応変に対応する必要がある。それでも、スクレイピングから新しい報道の切り口になるデータを取り出せると思うと、期待感が膨らんだ。

デジタル分野の調査報道で先を行く先輩記者から「公益にかなう内容であれば、報道機関はそのデータを積極的に取得すべき。一つひとつ覚えていこう」と励まされた。

データを自ら集める作業は、記者冥利に尽きる。出席者の多くもそう感じたのか、講義後、パソコンを片手に講師に詳細を質問する姿が多く見られた。

読売新聞社地方部内信課(読売新聞デジタル担当) 長嶋 徳哉

59
記者ゼミ

富山 政務活動費

宮城 克文(チューリップテレビ)

「迷ったら一歩前へ」 執念の調査報道で不正明らかに

7月。その資料がようやく届いた。富山市議たちが2013年度に使った政務活動費(政活費)の記録、4300枚。入手したはいいが、どこに着目すればいいのか見当がつかない。高く積まれた紙の束を前に、ため息が漏れた。

政活費は、政策調査研究などの費用として議員報酬とは別に支給される。富山市議の場合は月15万円だ。

取材の発端は4月。富山市議会が報酬の月10万円増額方針を打ち出したこと。なぜそんなにお金が必要なのか確かめようと、政活費支出記録の情報公開請求をしたことにした。

実は、このとき少し迷いがあった。まず費用の問題。資料を入手するには1枚あたり10円の印刷代がかかる。全議員の記録3年分を請求したので、15万円程度の支出が見込まれた。「放送に結びつかなかったら……」という不安が頭をよぎった。

また、もし請求内容が議員に漏れたら「宣戦布告と捉えられるかも

……」という怖さもあった。しかし、「迷ったら一歩前へ」と言い聞かせて、5月末に請求した。

膨大な支出記録と格闘の日々

政活費の記録が届いたのは、請求の1カ月半後。それから毎晩、富山市記者と私で1枚ずつ確認した。

各会派が事務局に提出した伝票や領収証には、議員個人名の記載がない。そこで、添付資料の中から議員の特定につながる材料を抽出した。

同時に、信頼できる情報筋とも連日、電話などで意見交換した。こちらの動きが悟られないよう、付き合

いが長く、口の堅い人を厳選した。少しずつ、有力な情報が入るようになってきた。「自民党議員が白紙の領収証を使っている」というものや、「虚偽の市政報告会で配布資料の印刷代を不正取得している」というものだ。そうした情報を得るたびに4300枚の記録を見返した。

やがて、市議会のドン・中川勇氏

の疑惑が浮かび上がってきた。中川氏の市政報告会のうち、市立公民館の使用記録(公文書)を情報公開請求したところ、開催実績はなかった。本人に直撃取材し、8月19日、私たちは富山市議会の不正をめぐる最初の報道に踏み切った。

翌日以降、地元紙などが後を追って報道したが、中川氏は失踪し、連絡がつかない状態となった。私たちの第一報の11日後に中川氏は辞職。市議たちの辞職ドミノにつながっていく。

その後、市民の反対意見が多かった報酬引き上げは取り下げられた。

市職員が情報公開請求内容を漏洩

問題はさらに発展した。私たちが政活費の支出記録や公民館の使用記録を情報公開請求したことを、議会事務局や教育委員会が漏らしていた



右は
政治費の支出伝票をつぶさに確認
筆者(チューリップテレビ提供)

のだ。この情報漏洩が議員による隠蔽工作につながっていた。

監視を受ける公人に個人情報漏れるようでは、請求者は不利益を受けるのが心配になり、萎縮してしまう。情報公開制度の根幹を揺るがす事態が密かに起きていたのだ。

取材開始から半年。一連の不正を明らかにできたのは、「正しいことをしている」との自信が「怖い」という気持ちを上回り、携わった記者全員が毅然とした態度で議会や行政と対峙したからだと思う。

本来、議会には、当局の仕事のチェックや当局にない視点での政策提案が求められる。しかし富山市議会にはあまりに閉鎖的で、多様な民意と向き合ってきたとは言い難い。

視聴者からの激励の電話やメールも原動力になった。それらからは「怒り」に加え、「政治をより身近なものに変えてほしい」という期待も感じる。

今回、不正をすぐに認めない議員が大半だった。それを、請求した資料を調べ、裏付け取材を重ねることで真相を明らかにした。調査報道の大切さをあらためて学んだ。

みやき・かつふみ▼1997年入社 富山県政記者 ニュースキャスターなどを
経て 2016年から報道制作局デスク

大隅良典氏 医学生理学賞受賞

相本 倫子(西日本新聞社)

ノーベル賞の快挙を 究極のローカルニュースに

「大隅さん、大隅さんだ!」。10月3日午後6時半すぎ、編集局は一気に興奮に包まれた。「単独か、共同か?」と確認する声。共同通信のピコが「単独受賞です」と流すと同時に、編集者が準備していた号外のゲラを持って走りだした。

今年のノーベル医学生理学賞に、福岡市出身の大隅良典・東京工業大栄誉教授(71)が決まった。同市に本社を置く「九州の新聞」、西日本新聞にとって大隅氏受賞の世界的ニュースは、究極のローカルニュースでもあった。

大隅氏が卒業した福岡高校では毎年、同窓生らが集まって発表を見守っており、当日、一緒に待機していた記者たちからは、続々と喜びの表情が入ってきた。福岡にはいない関係者とも数年来コンタクトを保っており、同氏の実兄や友人らの逸話、祝福の言葉も記事化した。東京の会見場からは、古里のエピソードを織り交ぜたメインサイド記事も届いた。

翌日の朝刊社会面は「人と違うこと『追究』」と大隅氏の横顔を描き、第2社会面は「福岡高化学部が原点／『よっちゃんありがとう』／同級生歓喜『母校の誇り』」と地元色全開。続く夕刊では、一夜明けての単独インタビューを1面に掲載、見出しは「博多は人情あふれる街」だった。

九州のノーベル賞元年 下村ショックの教訓

本紙のノーベル賞取材は、文学賞を除いて社会部が中心となる。事前準備の段階から、主眼は予想される候補の人物像に迫り、地元ニュースとして掘り下げることだ。研究業績などは通信社原稿を活用すると腹をくくり、ローカル色を重視する。

こう書くともソッドでもありそうだが、手探りの部分もまだ多い。九州の「ノーベル賞元年」は2008年と最近だ。クラゲ由来の緑色蛍光タンパク質発見で化学賞を受賞した下村脩氏は、京都府出身だが長崎県

内で少年時代を過ごし、長崎大薬学部の前身で学んだ。日本人16人目の受賞で、初の九州関係者となった。

不幸なことに、寝耳に水だった本紙は、長崎総局や支局の記者たちが狂奔する羽目に陥った。それまでもノーベル賞準備は年中行事だったが、この下村ショックで明らかに潮目が変わる。最たる違いは「ノーベル賞はローカルニュースである」という「実感」だった。

「西日本さんらしい」 特ダネ・ポンツク

14年、九州生まれの第1号として、鹿児島県出身の赤崎勇氏が物理学賞を取った際には、前年から本人取材を進め、何とか間に合った。大隅氏は13年、本社の記者が横浜市の大学研究室を訪ねている。「社会部ですから」と、研究内容よりも福岡時代につ



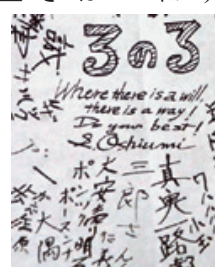
大隅良典氏のノーベル賞決定を伝える号外。裏面(手前)は地元色を前面に(西日本新聞社提供)

いて根掘り葉掘り尋ねる記者に、大隅氏は「西日本さんらしいね」と笑って応じてくれたという。このインタビューが引き継がれ、発表当日のメインサイドに生かされた。

一方、想定外の「特ダネ」もあった。発表翌日、大隅氏の母校の中学を訪ねた現地支局長は、卒業アルバムに寄せ書きの写真を見つけた。「ポンツク ポースンナ 大隅」。意味が分からないことが面白いと記事にすると、ネットでも拡散し「謎の寄せ書き」として話題になった。支局長は佐世保支局で下村ショックを体験しており「この手の取材は経験です」と苦笑していた。

今年の担当デスクとして、08年のパニックの再来を想像し、胃が痛い日もあった。歴代記者やデスクの周到な準備が生きた今回は幸運だった。「九州リスト」から大隅氏が消える一方、新たな候補も増えていく。ノーベル賞ウィークは過ぎて、未来へ向けた準備に終わりはない。

あimoto・みちこ▼1991年入社 社会部 文化部 編集センター整理デスクなどを経て 16年9月から社会部デスク



下段中央付近に謎の寄せ書き

新・列島報告④ 大阪万博誘致

「夢よもう一度」
そろばん勘定が先走り鹿間 孝一
(産経新聞社)

だが、正直、地元でもあまり盛り上がっていない。

■1970年はセピア色の思い出

「これまで欧米から一歩も出なかった万国博を、はじめてアジアで開きたこと。人類の尊厳と幸福をめざす新しい万国博を創造しようとしていること。そのことにわたしたちはかぎりない誇りを感じる」

1970年の大阪万博は、わが国の高度経済成長を世界に誇示するイベントだった。サンケイ新聞(当時はカタカナ題字)は開会式の紙面でこう書いた。

万博史上空前の6422万人が詰めかけ、「月の石」を展示したアメリカ館など人気のパビリオンは数時間待ちで、「人類の進歩と調和」というテーマをもじって「人類の辛抱と長蛇」と揶揄された。

テレビ電話やワイヤレスフォンがお目見えし、マルチスクリーンの迫力に驚いた。77カ国が参加した会場内で世界旅行が疑似体験できた。ハンバーガーやフライドチキンなどのファストフードを初めて口にした。

万博世代が興奮気味に語っても、若い記者からは「ふーん」という反応しか返ってこない。それはそうだろう。手にしているスマホに比べ

ば、万博が見せてくれた「未来」はアナログで、セピア色の「過去」でしかない。

高齢化時代を迎えて「健康・長寿」というテーマは今日的であり、普遍的である。関西には生命科学や医療の研究機関、企業が多い。開催する意義はある。だが、基本構想素案からは、どのような万博になるのか想像がつかない。

■官民に同床異夢？温度差も

大阪府は万博では初めての24時間開催を検討している。24時間運用可能な関西国際空港の利点を生かし、好調なインバウンド(訪日外国人客)に弾みをつけようというのだ。さらに会場候補地の夢洲には、万博後にIR(統合型リゾート)の誘致をもくろんでいる。アクセスとなる鉄道延伸が万博によって実現し、他のインフラも整備できれば一石二鳥である。

一方、安倍政権には、憲法改正を見据えて、松井知事が代表を務める日本維新の会をつなぎ止めておきたいという思惑があるようだ。

関西財界は消極的だった。会場建設費として1200億から1300億円、運営費は690億から740億円と見積もられ、3分の1は民間



大阪万博の会場候補地の夢洲(産経新聞社提供)

負担とみられるからだ。地盤沈下が著しい関西の経済界にはボンと出せる金額ではない。また、経費が膨れ上がって計画見直しを余儀なくされている東京五輪を見ると、及び腰なのも無理はない。

11月中には官民一体の誘致委員会が設置される予定だ。誘致が正式決定すれば、来春にも博覧会国際事務局(BIE)に立候補を届け出る。パリとの争いになるとみられる。

「夢よもう一度」もよろろう。が、どんな夢か。それぞれがそろばんを弾く。同床異夢に思えてならない。

しかま・こういち▼1975年入社
大阪社会部長 東京編集長などを経て
2010年から特別記者兼論説委員

大阪府が2025年の国際博覧会(万博)誘致をめざしている。
「東京が2度目の五輪なら、大阪も2度目の万博を」。松井一郎府知事が言い出した時は、挫折した大阪都構想に代わるアドバルーンかと思っていたが、政府も20年の東京五輪・パラリンピック後の経済活性化策として前向きで、にわかに現実味を帯びてきた。

9月末に公表された基本構想素案によると、「人類の健康・長寿への挑戦」をテーマに、大阪湾の人工島・夢洲で開催する。3000万人以上の来場者を見込み、経済波及効果は約6・4兆円と試算している。

経済記者人生の点と点 商品情報で世界をつなぐ

長澤 孝昭



ながさわ・たかあき
1948年生まれ 74年時事通信社
入社 ロンドン特派員 商品経
済部長 編集局総務 神戸総局
長など 2012年からフリージャー
ナリスト

米アップルの創業者、スティーブ・ジョブズが2005年、スタンフォード大学の卒業式に招かれて行った「点と点をつなぐ」(connecting the dots)という話が好きだ。彼が自分の人生から学んだ3つの話のうち、最初の話だ。

「自分の興味と直感でやってみたことや出会った人たちとの交流の多くは、後から見れば、非常に価値のあるもので、その点がいつかどこかにつながると信じていれば、他の人と違う道を歩いていても、自分の気持ちに従う自信を与えてくれる」私の通信社マンとしての人生も点と点の連続だった。

◆ OPEC会議は、踊る◆

ロンドン特派員としてジュネーブのインターコンチネンタルホテルを

訪れたのは1986年3月14日、24日だった。ロンドンには石油市場があることから、市場関係の仕事は昔からロンドンで担ってきた。だからジュネーブやウィーンでOPEC会議が開かれると、ロンドンがカバーした。

OPEC総会は数ある仕事の中で最高にして最悪だった。行きは 런던で英国機。帰りはスイス航空機で疲労困憊だった。とにかく長い。10日間どころか最長2週間というのもあった。

86年は7月に10日間、10月には14日間もジュネーブにいた。早期決着か長期化か見通しが立たない。情報も少ない。特ダネを狙う気は全くない。落とさないよう気を付けるだけだ。毎度お決まりのパターンで会議が長引いている。頭が空っぽになっ

ている。もう少し有意義な時間の使い方もあると思うが、これが紛れもなくOPEC会議だ。自分の思うような仕事ができないのは仕方がない。現場にいると明けても暮れてもOPEC、OPECばかり。

同年12月10日から開催された協調減産では、原則一致しながら各論では依然調整が必要だった。10日間の徹夜の協議の末、20日午前5時半、劇的な幕切れに。イラク抜きとはいえ12カ国が第1、第2四半期について120万バレル強の大幅減産を行うとともに、18ドルの固定価格制復帰を決めたからだ。合意内容もショッキングで、もうろうとする頭の中で朝を迎えた。

87年、88年も回数は減ったものの、正直くたくたに疲れた。ローザンヌ、ロンドン、マドリッドとヨーロッパ

各地を日本のOPEC取材団は転戦した。日本記者団らしく、いわば合宿。同じ仕事をしていながら実は強い結束の下、遊びも仕事も共通していた。

今から約30年前はまさに「逆オイルショック」だった。

70年代は73年に3ドル台から12ドル台に、78年には12ドル台から30ドル台へ急上昇した。逆に80年代は86年に急落し、2月には15ドルを割り込み、3月末には10・42ドルへと最安値を付けた。

その後も湾岸危機・湾岸戦争を除いて原油価格は低迷したが、98年以降再上昇。このときはサウジアラビアがピーク時の1000万bpd(バーレル/1日)から約600万bpdに減産する事態となった。

これに直面したサウジアラビア



OPEC会議取材で発行されたプレスカードは今も手元に(筆者提供)

は、スイング・プロデューサーとしての役割をこれ以上続けたいと、シエバック宣言を表明し、ネットバック方式(石油製品を市場価格から一定の精製・輸送コストを引いて原油価格を設定する方式)を導入して、原油価格は市場の主導で決定されるようになった。

◆ CME 電子取引時代の到来

CME(シカゴ・マーカンタイル取引所)グループは、世界を先導する最も多彩なデリバティブ市場だ。リスク管理のために最も広範な先物・オプション取引を動かししており、NYMEX(ニューヨーク・マーカンタイル取引所)もCMEの一部門だ。つまり米国の金融先物取引市場

を牛耳っているのがCMEだ。その創業者はレオ・メラメド氏。彼は日本市場がなかなか活性化しないことについて、私がインタビュした時に、こう語った。

「取引の過程をもっと透明にすること。誰が売ったのか、あるいは買ったのか。あらゆることを透明にすることだ。そして透明化の努力を決して諦めないことだ。この努力を諦めなければ、必ず道は開ける」とにかく、「オープン・アップ」ということだった。

私は当時、日本の先物市場を統括する商況部長(後の商品経済部、現在は金融市場部)だった。30人の部員を擁する部だ。残念ながら商況部に先物部門はあっても現物部門がない。現物部門があつて初めて商況部と言えたが、商品部に先物部門がない日経と同じだった。

CMEの源流は1848年にシカゴに設立された世界初の先物取引所だ。設立以来、長い歴史と伝統を誇る一方で、電子取引時代の到来を予見した「先物の父」と呼ばれるメラメド氏の先見性などにより、90年代前半に伝統的なセリ方式の取引手法を電子取引システムへと革新し、大きく躍進することになった。

そして、2007年に競合他社と

の大規模な買収合戦に発展する中、CBOT(シカゴ商品取引所)を買収し、両社が合併して新会社の「CMEグループ」を設立。その後、CMEグループは、08年にNYMEXを買収し、今日ではCME、CBOT、NYMEX、COMEX(ニューヨーク商品取引所)の4つの取引所が中核となっている。

翻って日本。国民経済に必要なことから市場は存在するのだが、一般社会から聞こえてくるのは否定的な声ばかり。商品先物は公正で透明な価格形成の場だった。市場経済に不可欠との声を胸に自己変革に取り組み、東京工業品取引所は東京商品取引所を生み、東商には今年9月から日本取引所グループ(JPX)の取引システムが導入された。商品と金融の取引が一体化した。

◆ 日系人が生んだ南米の大豆の話

原油相場はウエスト・テキサス・インターミディエート(WTI)が代表油種として引き合いに出されるが、他の商品にも大豆やトウモロコシなどがある。代表的なのは大豆だ。98年に南米パラグアイに行った際、JICAの永井和夫氏の研究論文「パラグアイ日系農業者の発展と大

豆栽培」によると、不耕起(土を耕さない栽培方法)による大豆栽培は日本のJICAの支援の下で、70年代にまずブラジルで実施。その後、82年11月にパラグアイを襲った集中豪雨による土壌流出で、イグアス移住地での導入が決意された。

そしてパラグアイに生計を求めて移住してきた努力が無駄になってしまふと恐れた日系移民が、不耕起栽培を本格的に開始した。イグアス地域では日系人で構成される農業協同組合も全面的に協力し、収穫量も増えたという。

96年にはパラグアイでの不耕起栽培普及率は40%にまで発展。現在、同国の大豆輸出が世界第4位にある背景には、イグアス移住地の日系移民の貢献があるといえる。

イグアスの土壌から収穫された大豆は世界的な輸出産品となっているが、その価値を決めるのはシカゴ市場の先物相場だ。パラグアイは農業国であり、開発途上国だ。パラグアイを通じて世界が連携している。

ジュネーブから北米CME、そして南米イグアス移住地。商品情報で世界をつないだのは自分だった。それが正しいのか正しくないのかは分からない。つながる意味があつてこそ話だ。

被災地通信49 宮城県登米市

五輪ボート会場案に沸く 「メッカ」飛躍のチャンスに

本多 秀行（河北新報社）

9月25日、宮城県登米市の宮城県長沼ボート場（アイエス総合ボートランド）にはテントが設営され、にぎわった。市民300人以上が参加する「長沼レガッタ」は毎年秋に開催され、今年で27回目。競技用ではない底が広く安定したボートを使用し、競技経験のない市民が牧歌的な雰囲気を楽しむ。参加したクルーの主将は「早くビール飲みたい」と笑顔でテントに向かった。

宮城県北部にある登米市は人口約8万2000人。2005年、9町が合併し誕生した。長沼ボート場は1989年、翌年のインターハイに

合わせて宮城県が1000メートルのコースを整備。合併前の「迫町」時代の98年に国内唯一の常設8レーン2000メートルのコースになり、旧迫町にはボートに親しむ文化が根付いていった。

河北新報社が毎年夏に主催する「河北レガッタ」の大会運営を支えるのは、自身は選手経験がない「とめ漕艇協会」のメンバーや、地元中高生の父母らだ。例えばスタート時にボートを手で支える「ボートホルダー」なども担い、大会の2日間で選手よりも日焼けするのだ。

■「いっちゃん来るんじゃ…」

99年にシドニー五輪アジア予選を兼ねたアジア大会が開催されるなど国際基準を満たしたコースで、今年6月には東京五輪の事前合宿地を探すカナダチームが視察に訪れ、「素晴らしい施設」と高く評価した。8月には、日本ボート協会主催の全日本新人選手権が開催された。国内主要大会の開催に、県ボート協会役員は上機嫌だった。「東京が今、ごたごたしている。こっちに来るんじゃないかな」。もちろん冗談だった。

が、9月下旬、その役員は「まさか」と驚くことになったのだ。その後、市内は歓迎ムード一色になる。市民有志は10月7日、「東京五輪・

パリンピックの水上競技場の宮城県登米市会場を歓迎する市民の会」を発足。市内に「歓迎」の看板が目につくようになった。同15日、小池百合子東京都知事が視察に来た際は約3000人が迎えた。

■水を差すのはタブー？

このムードに、会場誘致に否定的なことは言いづらい。とめ漕艇協会会長は、長沼会場案が浮上した当初「運営面で課題が多い。大変だ」とコメント。私は記事にしたが「君のせいではないんな人から（文句を）言われた」と漏らした。誘致に水を差してはいけない空気は、東日本大震災の被災者にもあるかもしれない。

宮城県が選手村と想定したのは、



大勢の市民クルーが競い合った今年の「長沼レガッタ」（河北新報社提供）

登米市内の仮設住宅を広くリフォームした部屋だ。現在、仮設住宅に暮らす人の多くは「活用されるのはうれしい」と喜ぶ。が、仮設住宅から今年引っ越したある男性は「自分たちが狭いと感じて我慢して過ごした部屋が、選手のためにこんなに立派になるんだなあ。複雑だけど、五輪誘致に否定的なことを今は言いたくないよ」と笑いながら漏らした。

宮城県議会では同21日、議員から「被災者の中には生活再建が困難な人もいる。復興財源を（ボート場整備に）使うのは適切ではない」などの質問が出た。

この記事が出る頃には、会場問題の結論は見えていただろう。原稿を書いている10月22日時点では、決定ではないが「長沼変更案」は力が弱まっているように感じる。今回、登米という地方都市がこれだけ注目を集めたのは初めてだ。合併前の旧9町の住民が「五輪誘致」で心一つにした。そして、一連の報道で長沼ボート場のレース環境の良さを広く知らしめることができた。今後「ボートのメッカ」となるべく、魅力を高めていくきっかけにしてほしい。

ほんだ・ひでゆき▼1989年入社 報道部 スポーツ部などを経て 2015年4月から登米支局長

私が会った
あの人

小さなまちの大きな町長 地域おこしの先駆け 島本虎三さん

石川 徹 (北海道新聞社)

小池百合子東京都知事をはじめ
国会議員から知事への転身は珍しくない。区長や政令市長に転じた人もいる。だが、小さなまちの首長となると、国会議員の妙なプライドからか、ほとんど例はない。小樽市に近い果樹の産地、後志管内仁木町(現在の人口約3400人)で、保守系町民に担がれて1979年から2期8年間、町長を務めた島本虎三さん、通称「島虎さん」は、直前まで5期16年間、社会党の衆院議員という異端の人だった。

私は駆け出し記者としてニッカウスキー工場の所在地で知られる余市町の支局に赴任した83年から3年間、仁木町に通い詰めた。国会での島虎さんは一貫して公害問題を追及し、「公害の島虎」で鳴らした、と聞いていた。だが、町長室での島虎さんは全然偉ぶる

こともなく、「もっと仁木の記事を書いてくれよ」が口癖だった。

そんな中で、今も記憶に残る思い出がある。初めて彼の町政運営を批判した時のことだ。

最近でこそ、行政と民間との連携は珍しくないが、島虎さんは私が赴任した年、岐阜県で活動していた半農半工の若者の職人集団を招き、西武流通グループと町との3者で協定を結んだ。農産物の加工・流通をはじめ経済、文化活動を一体にした新しい形の地域おこし、という触れ込みだった。

町長室には若者集団が当時製作していた、シェーカー様式のロッキングチェアを置くほどの肩の入れよう。町民からは当然、彼らへのやかみの声も上がった。

彼らが仁木町へ移住してくる前に活動をしていた岐阜県清見村(現・高山市)に取材に行くと、役場幹部

は「あいさつもなくて去っていった」と素っ気なかった。清見村役場の声を基に、3者協定による町づくりにくぎを刺す記事を書く、若者集団からは抗議が来た。だが島虎さんの反応は違った。

「長い目で見てやってくれや」

彼は役場職員からかんしゃくを落とすことで恐れられてもいただけに、掲載後、初めて会った時の優しい声には、拍子抜けした。

若気の至りで書いた記事でも、事実に基づいているなら受け入れようという度量があった。

現在の地域おこし協力隊の先駆けともいえる若者集団はその後、仁木町を去り、隣接する赤井川村に本拠地を移した。町の人口も、島虎町長時代より1500人減った。だが、



2期目の抱負を語る島虎町長(筆者撮影)

西武流通グループとの契約で栽培が始まったブルーベリーは、サクランボ、ブドウに次ぐ町の主要産品となった。若者集団に触発された仁木の若者たちが始めた「さくらんぼフェスティバル」は今、初夏の道央圏の名物行事である。

島虎さんは町長を退任した翌88年、第4次全国総合開発計画を審議する国土審議会の特別委員に、当時の竹下登首相から任命された。島虎さんの活動に共感した伊東正義自民党総務会長(当時)の推薦だった。島虎さんは翌89年、75歳で亡くなったが、伊東氏は北海道新聞に「敬愛していた人だけに非常に惜しい人を亡くした」とのコメントを寄せている。

「虎は死して皮を留め、人は死して名を残す」とのことわざがある。島虎さんが名も功績も残せたのは、政治家としての格とか立場とかを超えて住民の課題に真正面から立ち向かったからだ、と今になって思う。

(いしかわ・とおる 東京編集局長)

次号は川上高志さん(共同通信社)にバトンが渡ります。

何とも感情が揺さぶられる映画である。「湾生」とは台湾生まれ、台湾育ちの人々を指す。戦前、植民地下の台湾に生まれた日本人の湾生は20万にも上る。敗戦によって、ほとんどの湾生は引き揚げを余儀なくされた。戦後70年余を経た今、望郷の念にかられた湾生たちが、それぞれの思いを抱きながら、ふるさと「台

湾生回家

試写室



日台関係 ひとつの物語 強制送還された日本人の里帰り

湾」を再訪する。その姿をドキュメンタリータッチで描いたのが、この作品だ。

湾生たちは敗戦後、1人当たり千円(当時)とわずかな食糧、リュックサック2つの身の回り品だけの携行が許され、日本に帰国した。敗戦後の日本は混乱と極貧のどん底にあった。多くの湾生は日本の生活を

経験したこともなければ、頼る親族さえなかった。湾生たちの苦勞は想像に難くないが、それだけ台湾での豊かで楽しい日々思いが募った。

「広島にやつと落ち着き、神戸までコメの担ぎ屋をやったことがあった。だが警察に捕まってしまった。それでやぐざの世界に入ったこともあった」と、ある湾生は涙ながらに回想する。70年ぶりの「回家」(帰省)に、当時の友人らが歓迎してくれた。彼の口からいつの間にか、「台湾語」が飛び出していた。別の女性は「日本にも友達がたくさんいる。でも日本ではいつも異邦人」日本では病気がちだが、台湾に戻ると元気になる」と、台北で明るく語った。

作品は台湾で評判を取り、台湾の映画賞にもノミネートされた。試写会でもらったパンフレットには「温かく迎え入れた台湾のこのころ」「日台の絆の原点」とあった。だが、やはり植民地での物語。映画のような感動話ばかりではあるまい。ところどころに見える冷たい視線にも気づくべきだろう。ましてや他の植民地、占領地で同じ物語を期待してはなるまい。

読売新聞出身 高井 潔司
11月12日から岩波ホールで公開
©田澤文化有限公司

■会議報告

●第467回企画委員会

(10・5 大会議室)

新委員の坪井ゆづる・朝日新聞社論説委員(旧・恵村順一郎氏)のあいさつの後、今後のゲスト候補を検討した。

出席 西村委員長、坪井、安井、倉重、脇、水野、別府、宮田、川上、軽部、石川、山本、瀬口、傍示、久保、島田、竹田、山崎、川戸、播摩、和田、袴田、ワグナー、梶本、橋場の各委員。

●第377回会報委員会

(10・7 大会議室)

11月号の編集と12月号の「わたしのおすすめ本」について協議した。17年1月号の「新春随想」を梅津時比古氏(桐朋学園大学学長・毎日新聞特別編集委員)に依頼することを決めた。

出席 飯塚委員長、稲沢、大辻、井上、吉澤、大寺、長崎、藤井の各委員。

●第470回会員資格委員会

(10・20 小会議室)

新委員の鈴木博之・共同通信社編集局次長(旧・新堀浩明氏)のあいさつの後、11月1日付入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 増田委員長、石田、越中、鈴木、小池、井上、山本、青木の各委員。

●第122回総務委員会

(11・1 小会議室)

16年度上半期の事業報告と中間決算を事務局が報告。個人D会員の割引会

費の見直しと会費引き下げに関する原案を了承し、理事会に上程した。

出席 原田委員長、西村、飯塚、深田、岩田、袴田、篠塚、西淵、木村の各委員、伊藤理事長、荒木副理事長、土生専務理事。

●第591回理事会(11・1 大会議室)

一、16年度上半期の記者会見などの行事と決算について事務局が報告した。

一、個人D会員の会費引き下げと80歳以上の割引会費を廃止する会費規則の改定を議決した(1、2ページ参照)。

一、第20期日本記者クラブ賞推薦委員会委員を左記の個人D会員に委嘱することにした。(※印は新任)

野村彰男(朝日新聞出身)、岡部直明(日本経済新聞出身)、茅野臣平(テレビ朝日出身)、音好宏(上智大学新聞学科教授)、*清水光雄(毎日新聞出身)、*白水忠隆(読売新聞出身)、*会田弘継(共同通信出身)、*神志名泰裕(NHK出身)

一、日本記者クラブ賞規約に基づき、17年度日本記者クラブ賞と同特別賞を実施することを決定した。

一、会員資格委員会です承された会員名簿の発行廃止を事務局が報告した。

出席 伊藤理事長、荒木副理事長、土生専務理事、西村、原田、飯塚、深田、田辺、行武、渡邊、矢島、坂谷、岩田、袴田、西淵、篠塚、吉次、沓岐、村川、木村、西野の各理事、沖永、二木の両監事。

マイBOOK マイPR

■オバマへの手紙 ヒロシマ訪問秘録

三山 秀昭（広島テレビ社長）

オバマ広島訪問の秘話ドキュメント
オバマ米大統領と森重昭さんとの抱擁は誰もが覚えていて。しかし、訪問までのプロセスは今なおベールの中。そこに焦点を当てたのが、この本。

①オバマの初訪日の際、米側の広島訪問打診に、日本外務省は事実上のNO②その後、安倍首相の靖国参拜で、アジア重視策の米側が「失望」して遠のく③地元広島はサミット誘致でオバマを招こうとするが、首相は「伊勢」に拘泥、オバマは「サミット」が理由の広島訪問ではなく、自らの意思で広島へ行く」と広島サミットを敬遠。さて、米側は森さんの存在をどうして知った？
…など、タイムトル通り、秘話満載だ。



文春新書 842円

■宮尾登美子 遅咲きの人生

大島 信三（産経新聞出身）

作品より面白いスリリングな生涯
「宮尾作品は人物がくつきりと描かれていてドラマ化しやすい」と、あ

るテレビプロデューサーから聞いた。出世作の『権』を皮切りに『陽暉楼』『寒椿』『鬼龍院花子の生涯』『序の舞』『天璋院篤姫』がテレビ、舞台、映画になって話題を呼んだ。

確かに作品も面白いが、芸妓娼妓紹介業の家に生まれた作家の生涯の方がはるかにドラマチックで、スリリングである。逆境でも諦めず、マインスをいつの間にかプラスに転じていく生き方には学ぶべき点が多い。



美春書房出版 1944円

■ユーロは絶対に崩壊しない

伴野 文夫（NHK出身）

欧州の明日はドイツか英国か？ 50年前のブリュッセル駐在以来、長年にわたるEU取材の集大成です。私の本とほとんど同時にE・トッドの『問題は英国ではない、EUなのだ』が出版されました。

面白いことにトッドと私の見解は、まったくの真逆です。トッドはイギリス派でドイツ嫌い。やがて欧州をリードするのはイギリスだと言います。私はフランス派ですが、大英帝国は衰退しつつあり、EUの明日はドイツが握っていると見ます。どちらを選ぶか、読み比べてくだ

寄贈書

さい。10年もすれば答えははっきりすることでしょう。



幻冬舎ルネッサンス新書 864円

■プリンセスの育て方 美智子さまから眞子さま佳子さまへ

渡邊みどり（日本テレビ出身）

身近なお手本と厳しいしつけ 美智子さまは「公務のできる内親王」として紀宮清子内親王をお育てになった。内親王の務めは国民に尽くし見返りを求めないこと。華やかだが厳しい存在である。清子さまを「ねえね」と慕いロールモデルとして、こ

公務に積極的に取り組まれる眞子さまと佳子さま。厳しいしつけは母である紀子さま。いいお家に生まれただけではプリンセスにはなりません。身近なお手本と厳しいしつけがあつてこそ、素敵なプリンセスが生まれるのです。



こう書房 1512円

◎新刊書をご紹介します

会員の皆さまが出版された本を「マイBOOKマイPR」で紹介しします。200字程度で内容や狙いをおまとめください。お問い合わせは村田（03-3503-2729、murata@jncor.jp）まで。

日本の現場 地方紙で読む2016

（早稲田大学ジャーナリズム研究所編）

地方紙の記事を総覧する機会には意外と多くない。ネット時代になっても、地方紙の記事群はなかなか全国に流通していない。本書はそうした点を補い、各紙の連載や特集を1冊にして世に送り出す狙いで編まれた。2010年版、12年版に続く3冊目。これまでと違い、収録記事は他薦から自薦へ、版元も早稲田大学出版部になるなどした。

収録は北海道から沖縄まで18紙。東日本大震災や福島原発事故の「その後」、子育てや貧困、ハセン病などの差別、高齢化の実相などテーマは実に多種多様だ。敗戦70年に関する連載を「イチオシ」とする地方紙も多かった。



早稲田大学出版部 2160円

本書を通読すれば、「東京目線」中央目線ではない視点の多様性が浮き彫りになる。まさに「現場を読む」である。深掘り度も一級。地方紙の、新聞の底力を存分に見せてくれる。

高田昌幸（高知新聞社報道部副部長・部長待遇）

情報発信

■フォーリン・プレスセンター 創立40周年記念シンポジウム

日本は女性アスリート活躍のための環境づくりが遅れているといわれる。「女性アスリートの活躍推進とメディアの役割～2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて」と題して議論が交わされた。(10.6 10階ホール)

■第23回新聞配達に関するエッセーコンテスト表彰式

日本新聞協会では新聞配達にまつわる心温まるエピソードをまとめたエッセーを毎年募っている。3280通の応募作から受賞者が決まり、表彰式が行われた。入賞作品は同協会のウェブサイトで見ることができる。(10.8 10階ホール)

■第69回新聞週間 記念の集い(東京会場)

「リオ五輪から東京五輪に向けての展望」と題して、リオ大会出場選手やメダリストなどが、選手本位の五輪の在り方やマスメディアへの期待について討論した。(10.21 10階ホール)

■「自治体財政に切り込む！」記者セミナー

主催：朝日新聞ジャーナリスト学校
市町村の財政指標を分析する演習を通じて、予算・決算の記事を書く能力を高めるセミナー。全国から約60人の記者が参加した。(10.24、25 10階ホール)

■第5回日中韓3か国報道人セミナー

主催：日本新聞協会
「メディアからみた3か国の課題と方向性—歴史、経済、安全保障」をテーマに、3か国の記者40人が討議した。(10.26 10階ホール)

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらによる定例の勉強会。10月は石破茂氏(10.5)、新藤義孝・自民党政調会長代理(10.12)、岡田克也・前民進党代表(10.19)、遠藤利明・前オリンピック担当相(10.26)を招いた。

■ニュースパーク トークショーのご案内

ニュースパーク(日本新聞博物館)でトークショーを開催します(定員は各回100人、要予約・先着順)。参加希望者はメール(npevent@pressnet.jp)または往復はがき(〒231-8311 横浜市中区日本大通11 日本新聞博物館「トークショー」係)に希望日時と住所、氏名、年齢、電話番号を明記してお送りください。

●安田菜津紀さん(写真家)

【日 時】11月26日(土) 14:00～15:30

【テーマ】戦時下で生きる、平和を考える

●石黒敬章さん(古写真収集家)

【日 時】12月3日(土) 14:00～15:30

【テーマ】電通アルバムから時代を読み取る

新しいOB 会員

■ **鳥越俊太郎** 1965年毎日新聞入社。サンデー毎日編集長、テレビ朝日「ザ・スクープ」キャスター、関西大学教授など。



喜寿を迎えましたが、日本記者クラブ賞をいただいたことを誇りに思い、これからも情報発信の仕事に励んでいきたいと思っています。

■ **長友佐波子** 1988年朝日新聞入社。AERA副編集長、週刊朝日編集長、メディアラボなどを経て2016年8月末退社。



早期定年退職でフリーになりました。28年勤めた新聞社を辞めたら、世界は違った色に見えます。新人の心持ちで書いていきます。

第106回ゴルフ会 少数精鋭の中での優勝

歴史ある日本記者クラブゴルフ会で9年ぶりに優勝しました。10月5日は台風の余波もあり、天候が悪いことが予想されたために事前に辞退



する人が出て、2組6人で回りました。当日は雨も降らずに八千代ゴルフクラブ(千葉県)で18ホールを回り切りました。スコアは前半49優勝カップを贈られる阿部会員(左) とぎりぎり50を切り、ほっとして後半になり45が出てハンディ15だったので、ネット79でした。日経出身の小嶋健史さんと弁護士の野本俊輔さんの良きパートナーに恵まれました。

前回の優勝賞品はノルウェー大使館の丹羽弘吉さん提供のノルウェー産サーモンがありましたが、丹羽さんが亡くなり、賞品が商品券に変わったのはさびしかった。何とかサーモンを出そうという話で19番ホールは盛り上がりしました。(朝日新聞出身 阿部和義)

新聞通信調査会 シンポジウムのご案内

「プライバシー保護とメディアの在り方」

個人情報やプライバシーの保護に対する関心が高まる中、メディアは現状を正しく把握し、対応できているのかを検証します。参加希望者は新聞通信調査会のウェブサイト(<http://www.chosakai.gr.jp/index.html>)またはファクス(03-6252-6037)でお申し込みください(応募多数の場合は先着順)。

【日 時】11月16日(水) 13:30～17:00

【会 場】イイノホール&カンファレンス

電話: 03-3506-3251

【登壇者】基調講演=津田大介氏。鈴木正朝・新潟大教授、神田知宏・弁護士、山口真一・国際大講師、杉田弘毅・共同通信社論説委員長、松本真由美・東大客員准教授

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 霜月懷石(12/2まで)

先付：穴子小袖巻、アスパラサーモン巻 お椀：胡麻豆腐、海老葛打ち 造り：三点盛り 焼物：鰯柚庵焼き 煮物：ぜんまい信田巻 揚げ物：公魚天ぷら 食事：蟹雑炊 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円) (板長：大井由光)

洋食 おすすめコース(12/28まで)

牡蠣フライ サラダ仕立て、コンソメまたはオイスターチャウダー、鹿背肉のソテー・赤ワインソース、チョコレートナッツサンデー、パン、コーヒー付き(3,996円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

冬限定 特別メニューのご案内

下記のように、恒例の冬限定の特別メニューをご用意しています。いずれも要予約(03-3503-2723)で、お二人からお受けします。

●特製きりたんぼ鍋(お一人2,500円)

11月14日(月)～25日(金)(土曜は除く)

産地直送で比内地鶏を仕入れ、アラスカ特製のだし汁で味を調えました。

●ふぐコース(お一人5,940円)

11月28日(月)～2017年2月3日(金)

きりたんぼ鍋に続いて、こちらも好評のふぐコースを始めます。刺身に唐揚げ、鍋の後は締め雑炊でふぐを堪能してください。



HP更新情報 <http://www.jnpc.or.jp/>

■会見詳録 会見の全文文字記録版

●シリーズ企画「チェンジメーカーズに聞く」⑩

「EVとドローンでメガベンチャーに」徳重徹・テラモーターズ、テラドローン社長(2016.9.28)

●「海外引き揚げ70周年―体験の継承」加藤聖文・国文学研究資料館准教授(2016.9.12)

11月の行事予定(11/2現在)

16㊥	11:00～12:00 10階ホール 「生前退位を考える」 横田耕一・九州大学名誉教授
	13:30～15:00 10階ホール シリーズ企画「変わるアメリカ・変わらないアメリカ米大統領選」⑮ 高見澤将林・前内閣官房副長官補
	15:30～16:30 10階ホール シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」⑫ 川鍋一郎・日本交通代表取締役会長
18㊤	14:00～15:00 10階ホール シリーズ企画「国連と日本人」⑭ 川端清隆・福岡女学院大学教授

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) …… ☎3503-2723 ●会員事務 …… ☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階) …… ☎3503-2766 ●経 理 …… ☎3503-2728
- 貸室予約、宴会打ち合わせ …… ☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み …… ☎3503-2722
- 受 付 …… ☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス …… kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：134社 ●基本会員：746人 ●個人会員：1,293人
- 法人・個人賛助会員：64社・140人 ●特別賛助会員：101人
- 名誉・功労会員：12人 ●学生会員：151人 計：198社・2,443人

第22回賛助会員の会(10.19)

今年4月の開設から9月の閉鎖までリオ支局長を務めた、産経新聞の佐々木正明さんからリオ五輪・パラリンピックについて話を聞いた。開催前は治安の悪さに驚き、軍隊の投入で一転、安全になったことで2度驚かされたと言う。

競技取材では4連覇を逃して涙を見せた吉田沙保里選手が翌日の会見では、つきものがとれたようにサッパリした表情を見せたこと、逆転で金の内村航平選手の持つオーラなど、超一流アスリートから受けた強い印象も紹介した。

東京五輪についても、関係者だけが通行できる「オリンピックレーン」の設置問題や台風への対応などの課題を挙げ、「震災復興を世界へアピールする意味で宮城でのボート開催が良い。IOCは開催都市の決定を支持します」と。終了後、30人の記者が身体的にも物的にも損害を受けなかったのが一番の自慢だと笑った。

(事務局 河野聡)

■日本記者クラブ賞・特別賞候補をご推薦ください

日本記者クラブ賞・特別賞の募集が始まりました。締め切りは来年1月31日(火)です。

■日本記者クラブ賞

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績を挙げ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰します。会員または法人会員社に属する方々が対象です。クラブ会員であれば推薦できます。

■日本記者クラブ賞特別賞

2012年度に新設された特別賞は、原則として会員・会員社以外のジャーナリズム活動を顕彰します。ただし、会員社の取材班・番組班などチームとしての業績も対象となります。クラブ会員だけでなく、日本新聞協会および日本民間放送連盟加盟社に属する方であれば、どなたでも推薦できます。

両賞とも、推薦者は所定の用紙で、推薦理由(2000字以内)と参考資料を添えて提出願います。推薦書はクラブのウェブサイトからもダウンロードできます。

詳細は事務局の本庄(03-3503-2754)へお問い合わせください。

<訃報> 竹田純会員(朝日新聞出身、87歳)が10月15日、上田健一会員(毎日新聞出身、89歳)が同18日、今井久夫会員(産経新聞出身、96歳)が同23日死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

会報委員会

委員長＝飯塚 浩彦
委員＝稲沢 裕子 井上 洋一 大辻 一晃
大寺 廣幸 鈴木 仁 長崎 和夫
藤井 良広 藤澤 秀敏 吉澤 正一
渡辺 大祐

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：福島 範和（産経新聞東京本社写真報道局）



メダリストのパレードを一目見ようと、約80万人が沿道に詰めかけた＝10月7日 東京都中央区・銀座4丁目交差点

興奮の締めくくり

何かとスポーツで話題の多い1年が過ぎようとしている。やはりその成果からして、最大のものはリオのオリンピック、パラリンピックだった。

わたしの在職していた新聞社が昭和32年の入社当時は銀座にあったので、木枯らしの吹くこの季節は川沿いの小料理屋、というよりは屋台に毛の生えたような一杯飲み屋が懐かしくなる。今、オリンピックの興奮を締めくくる大パレードがさしかかった銀座4丁目の交差点周辺は、そのあと1964年の東京オリンピックに向けて大変貌を遂げた。川は埋め立てられ、その上を高速道路が走り、地下は掘り下げられて新たな地下鉄が網のように広がった。

それらの工事はおおむね深夜から朝にかけて、轟音とともに進行していたように思う。都心に近いアパートに住んでいたため、毎晩工事の轟音に悩まされたが、不思議に不愉快な思いはしなかった。

それほど当時の日本人は、この騒音が待望の東京オリンピックにつながるという期待感を持っていた。それに耐えることで、オリンピックを共有している満足感を味わえた。

オリンピックで人々が感じた期待、感動、興奮、選手と近づいた距離。全てをひっくり返した高揚感はどこかで収束させねばならない。パレードは勝者の凱旋行事だが、選手たちを支えた国民の熱気を冷ます締めくくりの役割も持っているようにも思う。

集まった人たちも、満足し、安らいだ表情で家路につくのである。

（後藤 文生）